

平成28年度笹川科学研究助成 実践研究部門（研究番号：28-809）

大阪くらしの今昔館の町並み展示を活用した「和の住文化」体験プログラムの実践

—外国人観光客と留学生に日本の住文化の魅力を伝えるために—

大阪くらしの今昔館（大阪市立住まいのミュージアム）

学芸員 服部 麻衣

## a.研究の目的

大阪くらしの今昔館は、江戸時代の大坂の町並みを実物大で再現した常設展示室が特色の博物館である。近年、外国人来館者が急増し、1日1,000人を超える日が続いている。当館では、これまで常設展示への理解を深めてもらうために、4ヶ国語のパンフレットや映像解説の多言語化に取り組んできた。しかし、当館で提供している着物体験と町並み展示での写真撮影を楽しむばかりの外国人来館者に対して、「和の住文化」を体験的に学ぶことができる学習支援の整備が急務となっていた。具体的には当館の町並み展示の「ほんものの建築」空間を活かした年中行事の体験、町家の掃除や戸締まりなど日常生活の体験である。

本実践研究は、住教育（大阪教育大学教授 碓田智子）、留学生教育（同国際センター教授 長谷川ユリ）、美術史・博物館学（摂南大学教授 岩間香）を専門とする研究者と協働して実施した。日本語・日本文化を学ぶ留学生および外国人来館者向けの「和の住文化」体験プログラムを実践し、さらにそれらを検証することによって、外国人来館者に日本の住文化の魅力を伝える学習支援のステップアップにつなげることを目的とした。

## b.実践内容

本研究は、①他館での外国人対応の調査、②留学生を対象にした「和の住文化体験」の試行、③一般外国人来館者（観光客）向けの「和の住文化」体験の実施、体験の検証の流れで進めた。

### 1)他館の外国人対応

他地域の博物館5館へ外国人の観覧者対応の視点から見学と聞き取り調査を行った。多言語化対応はいずれの館も進めているが、言語に頼らない体感的な理解につながるワークショップ等の取り組みは、外国人を対象にはあまり実施されておらず、この点が共通する課題であることが明らかになった。

### 2)留学生をモニターを対象にした「和の住文化」体験の実践と評価

大阪教育大学で日本語・日本文化を学ぶ留学生（13名）をモニターに、大学での事前学習の後、当館の展示室で「和の住文化」のミニ体験を実施した（2016年11月12日（土）13:30～16:30）。

町並み展示の解説見学のあと、町家の中で、当館のボランティアが指導して、大坂の商家で日常的に使われていた道具である「挽き臼体験」「風呂敷包み体験」「箱膳や竿秤、矢立てなど昔の道具の実演」を行った。体験後、留学生に感想を書いてもらい、体験の評価を行った。



◇お茶を挽き臼でひき、試飲する体験

その結果、お茶を挽き臼でひき試飲する体験、幾種類もの風呂敷の包み方の体験が共通して、留学生の関心が高いことが明らかになった。また、ボランティアの説明が十分に理解できないことがあっても、留学生は内容を理解して楽しむことができたことが窺えた。

### 3) 一般外国人来館者を対象とした「和の住文化」体験の実践と評価

留学生モニターを対象にした「和の住文化」の評価を発展させ、一般の外国人来館者向けの「和の住文化体験」を二日間に渡って実施した（2016年12月17日（土）・18日（日）13時から15時）。

町並み展示内の6カ所で、「昔の遊び体験」「矢立と筆」「風呂敷包み」「町家のお掃除」「こたつ」「挽き臼体験」を同時実施し、外国人来館者に自由に参加してもらった。体験はボランティアが指導し、体験者への説明補助とインタビュー調査は大阪教育大学と摂南大学の留学生等が中国語、韓国語、英語で行った。体験に参加した外国人来館者は2日間でのべ約1,000人、インタビューの回答者は計99名であった。



◇風呂敷包み体験

くことができなかつたが、本研究助成を得ることで実施できた研究の成果の一つである。

本研究で実施した「和の文化体験」は、一つ一つは小さな体験であり、また言葉が通じなくても、身振りなどで理解してもらえる簡単なものであった。それらを外国人来館者は楽しみながら参加することで、日本の文化についてリアリティを持って理解できたようだった。小さな文化体験であっても、外国人来館者に充分に楽しんでもらえることがわかった点が、第二の成果である。

また、「和の文化体験」を指導したボランティア自身が、外国人来館者との交流を楽しみ、身振りや簡単な英単語でコミュニケーションが取れたことに喜びを感じたとの感想が多く聞かれた。普段の館内活動でもやってみたいとの意見も出された。外国人来館者との交流について、ボランティアに自信とモチベーションを与えることができた点も研究成果といえる。

今回の実践研究の成果をもとにして、当館の日常の活動の中で継続的に小さな「和の住文化」体験を外国人来館者に提供することが次の発展課題であり、この研究成果の活用であると考えている。本実践研究の成果を全国の歴史博物館に発信することで、他館でも外国人向けの文化体験やワークショップを実施する際の参考となり、さらには海外からのお客さんに日本の住文化を理解してもらうことにつながることを期待したい。



◇着物をきた外国人来館者にインタビューをする留学生

### c. 実践研究の成果とその活用法

外国人来館者へのインタビュー調査から、着物体験と記念写真だけを目当てにではなく、住まいや暮らしの文化に関心を持って来館した外国人が少なくないことがわかった。これまで、外国人来館者に感想を聞